いくじなし！

キャロル・カーリック作
ドナルド・カーリック絵
定松　正訳

作者／キャロル・カーリック

1935年，ニューヨーク，ロングアイランド生まれ。現在，マサチューセッツ州エドガータウン在住。1966年『古い納屋』を発表以来，『池』(1970)『泥道』(1970)『大あらし』(1974)など，おもに田舎の自然を背景とした写実的な作品を書いている。各作品のさし絵は，ご主人のドナルドが受けもっている。

訳者／定松　正（さだまつ・ただし）

1937年生まれ。玉川大学文学部助教授。英米児童文学専攻。おもな著書に『児童文学』『イギリス児童文学散歩』。訳書に『失われた世界』『ジャングル・ブック』『みどりの魔法の城』『おしゃべり犬のぼうけん』『子ねこをつれてきたノラねこ』ほか。

いくじなし！　定価980円

1986年1月　第1刷発行

原　　作　キャロル・カーリック
翻　　訳　定松　正
発 行 者　浦城寿一
印 刷 所　東京印書館
製 本 所　協栄製本
発 行 所　さ・え・ら書房
東京都新宿区市谷砂土原町3丁目1
振替東京4-87244 ☎(代)03-268-4261

©1986 TADASI SADAMATU
NDC933　ISBN4-378-00721-5

いくじなし！

キャロル・カーリック 作
ドナルド・カーリック 絵
定松　正 訳

さ・え・ら書房

What a Wimp!
by Carol Carrick
Text copyright © 1983 by Carol Carrick
Illustration copyright © 1983 by Donald Carrick
Japanese translation rights arranged
by The Yamami Agency, Tokyo

もくじ

そりを返して！……4
みんな、いじわる！……14
指人形……23
運動場でのできごと……33
ぼく、どうすればいいんだ！……43
先生からの手紙……59
マフラー事件……74
ビーマス先生の笑い顔……91
おにいちゃん、ありがとう！……100
やったぞ、バーニー！……116
訳者あとがき……132

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そりを返して！

バーニーがいじわるをされはじめたのは、ヒルサイドの町に引っこしてきて、まもないころのことでした。あいてはレニー・クーツといって、バーニーがよく知らない男の子でした。そのころはまだ、ヒルサイドには、友だちもいなかったのです。

おかあさんはおとうさんと離婚すると、バーニーとおにいさんのラスをつれて、ヒルサイドに引っこすことにしたのでした。この町は、おかあさんが子どものころ、いつも、夏休みを楽しくすごしたところだったのです。

「あんたたちも、きっと気にいるわよ！　あそぶところがいっぱいあるしね。」

おかあさんは、そういいました。

おかあさんの話に、バーニーとおにいさんのラスは、もう、胸がわくわくしてしまいました。ふたりは、学校の友だちみんなに、すてきなところへ引っこすんだと、ふれ

まわったものでした。

ヒルサイドにうつってきてから、さいしょの一週間というもの、ずっと雪ばかりでした。これまで大きな町に住んでいたので、バーニーは、そりにのったことがありませんでした。そこで、おかあさんがショッピング・センターで買ってくれたそりをかかえて、バーニーは、さっそく新しい家から少しはなれた高い丘へと出かけたのです。

その丘は、そりあそびには、ぴったりの場所でした。その朝は、バーニーのほかは、だれもいませんでした。そりはスピードをますごとに、雪の上を、シューッ、シューッと音をたててすべりおりていきます。でも、丘の中ほどまできたとき、いきなりドスンと、石か何かにつきあたりました。いっしゅん、バーニーのからだは、そりからはねとんでしまいました。でも、どうにか立ちあがると、ふたたび、そりに腹ばいになって、下まですべっていきました。

そのとき、ふたりの男の子がやってきました。はじめて見る顔です。でも、バーニーは、いっしょにすべれるあいてがあらわれて、うれしくなりました。ところが、よく見ると、その男の子たちはバーニーより、少し年上だったのです。バーニーは、ちょっぴり気おくれを感じました。

それに、ひとりはそりをもっていません。その子は金髪で、濃い赤と黄色のしまがはいった運動着をきていました。バーニーのおにいさんが、ずっとほしがっていた運動着です。手には、ホッケーの棒みたいな木の枝をもち、それを雪のかたまりに打ちつけています。

バーニーは、ふたたび丘の上へとのぼりながら、「やあ。」と、声をかけました。いなかの町でくらしていくには、あいさつが一番です。だから、バーニーがまずおぼえたのは、この「やあ。」という、あいさつでした。この町の人は、おたがいに顔を知らなくても、あいさつをかわすのです。おかあさんがいうには、いなかの人は都会の人間より、心があたたかいからだそうです。はじめのうちこそ、バーニーはめんくらっていましたが、いまでは、だいぶなれっこになっていたのでした。

ふたりの男の子は、しばらくだまったままでしたが、やがてひとりが、ひくい声で「やあ。」というと、もうひとりの子といっしょに、くすくす笑いだしました。バーニーは、それを見て、なんだか、いやな気持ちになってきました。

ふたりは、丘の斜面のまん中につっ立ったまま、ふたたび下へすべろうとするバーニーを、じろじろ見あげていました。こうなると、さっきみたいに、腹ばいになってすべ

る勇気がわいてきません。あんなに、じろじろ見なきゃいいのに……。こんどは、ふつうのすべりかたにしよう。とまどいながらもバーニーは、そりに腰をおろし、両足で地面をけると、ひもをしっかりにぎりしめました。

ところが、そりがすべりだして、さっきのふたりのそばをとおりすぎようとしたときです。木の枝をもっていた男の子が、その枝をそりの前になげつけたのです。そりは枝にのりあげると、がくんと止まりました。と、つぎのしゅんかん、バーニーのからだは空中にほうりだされたかと思うと、雪の上にドスン――ううっ！――と落ち、丘を横むきになってすべりおちていきました。

バーニーは、何がなんだかわからないままに、しばらくたおれこんでいました。でも、やがて起きあがると、からだをはたき、くびのまわりの雪をとりはらいました。ふたりの男の子は、にやにや笑っています。バーニーは、おどろいた顔を見られまいと、うつむいていました。

「よう、ぼうや、このそりを使わしてくれよ！」

バーニーははじめ、自分が話しかけられているとは思いもしませんでした。声をかけてきたのは、金髪の、あの木の枝をなげつけた男の子です。見ると、バーニーのそりを

かかえています。

まさか、とバーニーは思いました。いまのぼくが、そりを使わせたいなどと思ってるのかどうか、あの子にわからないはずはないのだから。そりにのりたかったら、自分の友だちのを使えばいいのに……。ただ、ことわるにしても、どうやってことわればいいんだろう？

……でも、あの子にしたって、ほんとうは、ぼくにけがをさせる気で、枝をなげつけたわけではないんだ。ほんのじょうだんのつもりだったんだ。ラスにいさんが、いつもいってるように、ぼくはもっと、ものわかりのいい子にならなくちゃ……。

やがてバーニーは、しかたなくうなずきました。

すると、金髪の子は、もうひとりの子にむかって声をはりあげました。

「おい、カルソー！　やろうぜ！」

ふたりは、丘のてっぺんにかけのぼると、それぞれのそりに腹ばいになって、下まですべっていきました。

バーニーは、一、二回すべったら、そりを返してくれるものと思っていました。でも、金髪の子は、バーニーには目もくれようとしません。三回めが終わったところで、バー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ニーは勇気をだしていいました。
「ねえ、ぼくのそり、もう返してくれない？」
金髪の子は、ふたたび腹ばいになってのっかると、バーニーを見あげて声をはりあげました。
「もう一回だけ！」
こうしてふたりの子は、そのあと何回も何回も、競争しながらすべっていくのです。そして丘のふもとに近づくと、そのたびに、もつれるようにして、ころがっていました。ほんとうにおもしろそうです。バーニーは、そのようすをながめながら、自分も仲間にはいりたいなあ、という気持ちになりました。それに、丘のてっぺんにつっ立ったままなので、だんだん寒くなってくるのです。とくに、つま先がつめたくなっています。おまけに、さっき服の中にはいりこんだ雪が、とけかけているのです。
ふたりの男の子は、もう、すべるだけではおもしろくなくなっているようです。二つのそりを、楽しそうに、ガチッとぶつけあっています。それも、バーニーの新しいそりに、もう一つのそりをぶつけているのです。バーニーは、ふたりが丘のてっぺんにのぼってくるのを待ちながら、こういいました。

「そりを返してよ、すぐに！」
「もう一回。」
金髪の少年はそういうと、ふたたびすべりおりようとしました。
「だめだよ！　さっきも、そういったじゃないか！」
「一回だけ、たったの一回だけさ。」
少年は指を一本つきだして、こんどこそ、ほんとうだという顔をしました。
バーニーには、もう、そんなこと、うそっぱちだとわかっていました。
「いま返してくれよ、いますぐに！」
バーニーは、おこった顔をして、声をはりあげました。でも、その男の子がそのままだまって、そりを返してくれるはずがないことぐらい、わかっていました。それに、あいてはふたりです。そのうえ、バーニーより二つぐらい年上の少年たちです。
「そう、それじゃ、ほら、もっていきな！」
金髪の子は、むっとしたようにいうと、そりを前へほうりなげました。そりは、丘をずるずるとすべっていきました。もうひとりの子は、にやにやしています。
バーニーは、雪の斜面をつるつるすべりながら、なんともやりきれない気持ちで、そ

りのあとを追っていきました。

「いくじなし！」

金髪の子が、ふとい声で、はきだすようにいいました。

丘のふもとまで、あと一歩というときです。シューッ！ さっきのふたりが、一台のそりにのって、すべりおりてくる音がしました。バーニーは思わず、とびのきました。その横をふたりはくねくねと、ものすごいスピードでくだっていきました。そりの上におりかさなりながら、ふたりは、バーニーにぶつかるぐらいのところをとおりぬけ、丘のふもとで、ドスンと止まりました。

バーニーは、そりのひもをつかむと、道にひきずっていきました。

「帰るのかい？」

金髪の子が、声をかけてきました。

バーニーは、だまったままです。

「はやく、そりにのりたかったんじゃないのかい？」

もうひとりの、カルソーという子がいいました。

バーニーは、きこえないふりをしていました。

ひとりが、なにやらひくい声で話しています。バーニーには、きこえません。あとのひとりが、声をあげて笑っています。

バーニーのひえたほおを、くやしなみだが流れおちました。バーニーは、すばやく、なみだをはらいました。つめたくなった手ぶくろが、顔につきささるようでした。これから、この町でくらしていくというのに、これはまた、なんとしたことなんだ！……。

みんな、いじわる！

バーニーが居間にはいっていくと、おにいさんのラスは、テレビのレスリングを見ていました。おかあさんは、本をつめたはこを二階へはこびあげているところでした。ヒルサイドの家に引っこしてきてから、もう二週間にもなるのに、荷物はみんな、まだダンボールばこにつまったままなのです。

「そりは、どうだった？」

おかあさんは、かいだんのとちゅうで立ちどまると、たずねました。

「楽しかったよ。」

バーニーは、こたえました。

「そうでもなかったみたいね。」

「おもしろかったよ。ちょっと寒かっただけさ。」

バーニーは、そうこたえたきりでした。あの少年たちにいじめられたから帰ってきたなんて、とくにおにいさんのいるところで、おかあさんに話すのは、いやだったのです。そんなことを口にしたら、ラスにいさんは、ぼくだったらいじめられることなんかないねと、いうにきまっているからです。

おかあさんとおにいさんは、お昼ごはんを終えたとみえて、居間のテーブルの上には、バーニーのサンドウィッチとオートミールのビスケットがおいてありました。バーニーはサンドウィッチをほおばると、テレビの画面に目をやりました。

画面では、ぶよぶよしたおなかが、タイツからはみだしそうな、ちりちりの金髪男が、もうひとりの男のせなかにまたがっています。下になっているレスラーは、ごくふつうの人のようにみえました。バーニーは、このレスラー、いい人にちがいないと思いました。そのレスラーは、金髪男に足をねじまげられて、両手をマットにたたきつけていました。

「ほかに、何かやってない？」

バーニーが、たずねました。

「これが見たいんだ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com